



追悼

高島進先生を偲ぶ

伊藤文人

(日本福祉大学社会福祉学部准教授)

一時代を築いた巨星がまた一人逝った。

高島先生の世界福祉学上の貢献については、すでにまとめたのでそれを参照していただきたいが(拙稿「高島進教授の世界福祉研究の歩み」『日本福祉大学世界福祉論集』第110号)、ここで改めて、先生の貢献に触れておきたい。

高島先生の世界福祉研究は、主に①世界福祉発達史研究、②世界福祉理論研究、③批判的世界福祉政策研究、④世界福祉国際比較研究に大別できると思われる(上記拙稿参照)。しかし、彼の研究の特徴は、この4点が②を起点にして展開され、相互に関連しており、バラバラに追求されたもののようで実は主張の根幹は首尾一貫していることにある。彼は、個別の世界福祉現象の諸研究は対象が広いからなんでもできるだろうが、研究主体者がつねに己が考える「世界福祉とはなにか?」という鳥瞰的視点を持たない限り、それらの研究にはそれほど大きな意義は持ち得ないと述べていた。この意味で、先生は非常に優れた理論家であった。

30年前の臨調行革時代、先生は政策批判研究を旺盛に展開されたし、没価値的な政策技術研究動向に懐疑の眼差しを向けられた。私からすれば、世界福祉学会(界)は、先生の指摘をあまり深く反省せず、時を過ごしてきたのではないかと思うほど、批判性を失いつつある。しかも、臨調行革路線時代よりも露骨に世界福祉が削減される新自由主義時代を私たちが生きていることを想起すれば、なおさらである。しかし、例えば世界福祉士資格養成基幹科目における「世界福祉原論」が「現代社会と福祉」という名称に変更されたことなどが象徴しているように、この動向は世界福祉から「社会的なるもの」「政治的なるもの」への眼差しを著しく減退させた。世界福祉学(界)が福祉改革時代以来四半世紀にわたって、世俗の消費者主義的体質を内面化してきた部分是否定できないように思われる。

ところが、世界福祉(学)の外に目を転じれば、国内外を問わず新自由主義的グローバル化への抵抗運動が若い世代を中心に勃興しており、彼らの主張は、世界福祉(学)が見失っていた視点と方法を思い起こさせてくれている。私たちは真摯にこれから学び、さらに先生が提起してきた批判性を復活させなければならない。

生前、先生の政策批判研究は、批判ばかりで対案がないという反批判があったようだが、今は「リアリスティックな対案」を出すことで逆に自らの裾野を限定してしまっているようにも見える。小林秀雄は、ベルグソンを引いて、現代人は答えを出そう出そう

として失敗ばかりしている、そうではなく問題の所在を探りあてること、なにが問題の本質であるのかを提示する「ちから」の涵養こそが重要で答えなのではないか、「うまく問題〔質問〕を出すこと」が同時に「答え」なのだとし唆していた（小林秀雄『人間の建設』『学生との対話』新潮社）。小林の言葉は、次の先生の言葉にも通じていると思える。「総括的に言わねばならないことは、『価値自由』という科学的方法論それ自体がきわめて『価値的』であり、結局、社会福祉に関わる現実の政策の路線を支えるものとなっているということなのである」（高島進『社会福祉の理論と政策』ミネルヴァ書房、186ページ）。

この高島先生の言葉は、現在においてもきわめて強いアクチュアリティを持っており、30年経っても全く色あせていないどころか私たちの現在の立ち位置を逆照射してもいる。私たちは、タイタニックの船員や乗客が氷山に衝突することを想像できずに、与えられた船室を小綺麗にしたり、内輪のパーティに耽溺したりして満足しているかのような状態に陥っていないと果たして言い切れるであろうか。ビジョンやミッションなき学問や実践は現実に回収されていく。それは戦前の社会事業がたどった推移や、ソーシャルワークのグローバル定義をめぐる日本的展開の「素案」の内容を思い起こせば十分である。高島先生がこのことを知れば、「社会福祉学（界）は、今や針路なく漂うタイタニック号に近いのではないか？」と喝破されたことであろう。

私たちは先生が遺した自由かつ民主的で豊かな理論的思考枠組みを支える直観力や批判性を再興／再考し、社会福祉学における「社会的なるもの」「政治的なるもの」を復権させなければならない。